

# 域学連携による地域づくりの現状と課題

## — 「ふじとこ伊豆プロジェクト」の取り組み —

### Current Situation and Issues in Local Revitalization through Community-University Partnership

#### — A Case of “Fuji-Toko Izu Project” —

山本 早苗

YAMAMOTO Sanae

#### 1. はじめに

本稿では、常葉大学社会環境学部（旧 富士常葉大学環境防災学部）が中心となって取り組んできた石部棚田保全ボランティア活動 10 周年を契機に立ち上がった「ふじとこ伊豆プロジェクト」を事例に、域学連携による地域づくりの現状と課題について論じる。

本稿が対象とするフィールドは、伊豆半島南西部に位置する松崎町である。松崎町は、人口 7350 人、3050 世帯からなる静岡県でもっとも人口の少ない町である（2014 年 8 月末現在）。松崎町の高齢化率は 37.5% に上り、少子化が進むとともに、人口流出も進んでいるため、人口減少に歯止めがかからない（2012 年 4 月 1 日現在）。人口の自然減と社会減が同時に進んでいるが、近年では社会減が加速している。松崎町の基幹産業は、観光業と全国シェアの 7 割を占める桜葉栽培である。

地域を取り巻く環境は厳しいが、松崎町は、地域資源を生かした地域づくりに力を入れており、2010 年に「全国棚田（千枚田）サミット<sup>1)</sup>」を開催し、2013 年には静岡県「ふじのくに美しく品格のある邑づくり」の知事顕彰を受け、同年度、「日本で最も美しい村<sup>2)</sup>」への加盟をはたした。これまで町では、6 次産業化の動きに早くから対応し、教育機関や企業、NPO/NGO と積極的に連携してきた。町のシンボリック的存在である石部棚田は、石部地区住民が組織する石部棚田保存会により維持され、写真 1 のように、駿河湾と富士山を一望できる美しい農的景観が生み出されている。



図 1. 調査対象地

出典：石部棚田へ行こうよ HP

<http://www.ishibu-tanada.com/accesst.html>



写真 1. 石部棚田の景観  
(2013 年 8 月 29 日 筆者撮影)

本学では、表1に示した通り、これまで松崎町において域学連携活動に取り組んできた。具体的には、次章以降、「棚田保全ボランティア活動」、「マルシェ／カフェ」、「聞き書き／郷土料理／手わざ体験」を事例に取り上げる。

表1. 本学における松崎町・域学連携活動の展開

年度	活動内容
2003	環境防災学部・高木伸教授の自主ゼミで石部棚田保全ボランティア活動開始
2004	大学公式行事として石部棚田保全ボランティア活動開始
2007	「一社一村しずおか運動」（静岡県）認定
2010	「第16回 全国棚田（千枚田）サミット in 松崎町」分科会報告（高木伸教授）
2011	◆松崎町初の「地域おこし協力隊」誕生 （富士常葉大学環境防災学部2010年度卒業生・豊嶋学が協力隊に就任し、石部に移住）
2012	地域再生プロジェクトへの展開 ～ふじとこ伊豆プロジェクト ◆総務省「「域学連携」地域づくり実証研究事業」採択（研究代表：山本早苗） （第1回「聞き書き」「郷土料理&手わざ体験」 in 石部） ◆国交省半島振興室「担い手強化プログラム」採択（研究代表：山本早苗） （「棚田マルシェ」の開始） ◆国交省半島振興室主催・事業成果報告会「半島のじかん 2013 in TOKYO」 課題報告（学生代表：大石諒、清水滉介）
2013	活動10周年記念 ～さらなる飛躍に向けて ◆「棚田マルシェ&たんぼカフェ」（春・秋） ◆棚田キャンドルナイト・イベント「石部の灯り」協力 ◆「石部大地曳網まつり」復活 運営協力 ◆第2回「聞き書き&郷土料理体験」 in 石部 ◆「第19回 全国棚田（千枚田）サミット in 有田川町」（和歌山県）分科会報告（学生代表：露木みのり） ◆「石部音楽博覧会」（棚田コンサート）協力・出演 ◆「富士山麓 アカデミック&サイエンスフェア 2013」イベントエリア出展（パネル展示、地場産品販売） ◆日本最大級の環境展示会「第15回エコプロダクツ 2013」東京ビッグサイト（パネル展示、地場産品販売、プレゼンテーション）
2014	半島を結ぶネットワークづくり ◆「全国半島間交流会 in 津軽半島」（半島の地域づくり先進地視察・交流） ◆第1回「わかやまの棚田・段々畑サミット」、「縁農、棚田保全等に取り組む学生交流会」活動報告（学生代表：近藤伸子、堀井梓左、青木日向子） ◆第3回「聞き書き&郷土料理体験」 in 雲見 ◆「石部青空マルシェ」「いっぷく亭（カフェ）」定期開催（毎月第1日曜日） ◆「富士山麓 アカデミック&サイエンスフェア 2014」イベントエリア出展（パネル展示、地場産品販売） ◆「第8回 富士市環境フェア」（パネル展示、地場産品販売）

出典：年次活動報告書と活動記録をもとに筆者作成

## 2. 石部棚田保全ボランティア活動の展開

### 2.1 援農ボランティアの誕生

松崎町では、石部地区、岩地地区、雲見地区を合わせて「三浦（さんぽ）」地区と呼び習わしている。三浦地区は、かつて西伊豆の民宿ブームを生み出した地でもある。1980年代に民宿軒数がピークを迎えると、バブル経済の崩壊とともに観光業は衰退の一途をたどっていった。その後、過疎化と高齢化が急速に進んでゆく現状を前にして、町役場は、石部地区の棚田復元をシンボルとする地域活性化を地元で打診する。石部地区では、何度も総会を重ねた末に、棚田復元を地域の総意として決定するに至った。

石部地区は、1999年に「松崎町石部地区棚田保全推進委員会」を立ち上げて、棚田保全活動に取り組みはじめる（表2）。地元住民総出による茅刈り作業を行い、4.2ヘクタールの棚田を復元した。復元した棚田には、元の小字名を用いて「赤根田（あかんだ）」村と名づけ、みんなが笑って楽しく暮らせる地域になるようにという願いを込めて「百笑の里」と命名された。

2002年からは、棚田オーナー制度<sup>3)</sup>を導入し、約100組の棚田オーナーが参加するほどの大規模な棚田保全活動を展開している。棚田オーナー制度の導入と同時に、棚田の日常的な維持管理作業を担う実働部隊として「石部地区赤根田村棚田保存会」（以下、棚田保存会）が設立された。棚田保存会は、もともと遠洋漁業をはじめ海の仕事に従事してきた漁師たち7名から構成されている（写真2）。設立当初、60代だったメンバーは、今や70代～80代の後期高齢者世代になっている。これまでメンバーの入れ替わりはほぼなく、会長も初代から10年以上、同じ人物が務めており、世代交代と次世代の担い手育成が、今後の大きな課題となっている。

表2 棚田保全活動に関する組織・活動

年度	組織・活動
1996～	「松崎町グリーンツーリズム推進協議会」
	<b>棚田復元</b>
1999～	「松崎町石部地区棚田保全推進委員会」設立 「赤根田村・百笑の里」設立
2000～	「しずおか棚田・里地くらぶ」との合同で棚田保全活動（復元後、初めての田植え、稲刈り）
2002～	<b>「棚田オーナー制度」開始</b> 「石部地区赤根田村棚田保存会」設立



写真2. 石部棚田保存会

出典：石部棚田へ行こうよ HP

<http://www.ishibu-tanada.com/member.html>

棚田オーナー制度により、都市・農村交流が図られるようになったが、オーナーは、基本的に田植えと稲刈りのイベント参加に限定されているため、地域住民が、棚田の日常的管理を行わざるをえない。しかし、地元の労力だけでは追いつかないため、大学と地域が連携した棚田保全活動に取り組みはじめる。

2003年から、高木伸教授（2010年度、退官）のゼミ生数名が参加して、地元の方々の指導を受けながら、田植えや草取りの農業体験に取り組むようになる。当時の学長の理解があり、翌年から大学の公式行事として石部棚田保全ボランティア活動が認められ、数年経つと毎回40～50名の学生有志が参加

する大規模なボランティア活動へと展開した（表3）。地域と大学が連携した継続的な活動の功績が評価され、2007年には、石部棚田保全活動が「一社一村しずおか運動」（静岡県）に認定された。

表3. 石部棚田の年間活動スケジュール（2014年度）

月	作業内容	作業者*
2月	田起し	保存会 希ボラ
	畦づくり（畦草刈り・畦きり・畦たたき・穴埋め・水口補修）	保存会 学ボラ 希ボラ
3月	稲づくり	保存会
	畦づくり（畦草刈り・畦きり・畦たたき・穴埋め・水口補修）	保存会 希ボラ
4月	元肥料散布・代掻き	保存会
	畦づくり（畦付け・畦塗り）	保存会 学ボラ 希ボラ
5月	田植え（田植え祭）	オーナー・トラスト
	田の草取り・草刈り	保存会 希ボラ
	水管理	保存会
6月	田の草取り・草刈り	保存会 希ボラ
	水管理	保存会
7月	田の草取り・草刈り	保存会 希ボラ オーナー・トラスト
	水管理	保存会
8月	田の草取り・草刈り	保存会 学ボラ 希ボラ
	水管理	保存会
10月	稲刈り・稲掛け（収穫祭）	オーナー・トラスト
	脱穀	保存会 希ボラ オーナー・トラスト
	オーナー&トラスト米 袋詰め・発送作業	保存会 希ボラ

出典：石部棚田へ行こうよ HP <http://www.ishibu-tanada.com/schedule.html>

\*「保存会」は石部棚田保存会（構成員7名）、「学ボラ」は、常葉大学および松崎高校のボランティア、「希ボラ」は、その他の団体や一般の希望ボランティア、「オーナー」は棚田オーナー会員、「トラスト」は棚田トラスト会員<sup>4)</sup>を表す。

石部地区の棚田は、ほ場整備が行われておらず、すべて手作業で行わねばならず、春先に行われる「畦切り」（写真3）や「畦塗り」（写真4）と呼ばれる伝統的な農作業にもっとも多くの労力と技術を要する。夏の草刈りや草取りなど畦や水田内をこまめに管理しなければ、すべての水田に用水が回らないため、稲の収量を確保することができない。そこで棚田オーナー制度で必要とされる農作業を支援するために、学生による援農活動が行われ、石部棚田保全に欠かせない力となった。



写真3. 畦切り体験  
（2013年3月2日、筆者撮影）

石部棚田保全ボランティア活動は、2005年度より、富士常葉大学環境防災学部（現 常葉大学社会環境学部）の専門科目「ボランティア実習」として位置づけられた。3年生がリーダーとなり、地域の指導者から作業手順を教わり、全体を統括する役割を担う。本学では、年間を通じて棚田保全ボランティ

ア活動にかかわっている。2012年度からは、常葉大学も柵田オーナーとなり、田植え（写真5）や稲刈りの際には、毎回、約15名の学生有志が参加してきた。

柵田保全ボランティアを経験した学生たちの中からは、卒業後も継続的に柵田保全活動に参加して柵田オーナーになる者や、松崎町初の「地域おこし協力隊」となり、任期終了後も石部地区に定住する者も現れるようになった。

## 2.2 ボランティア活動の限界と活動の転機

これまで地域では、学生を柵田保全の労働力として期待しながらも、学生と地域住民・行政との意見交換の場を作るには至らなかった。こうした状況の中、2011年3月に起こった東日本大震災の影響を受けて、文部科学省による地域活性化事業に対する助成金が大幅に削減されたことにより、石部柵田保全ボランティア活動のもつ脆弱性や地域と大学の関係の歪さが露呈した。国の助成金や大学の補助金に依存した活動体制の見直しが必要の課題となり、従来の援農ボランティアに偏重した活動から脱却して、新たな方向性を模索する必要に迫られた。

石部柵田保全活動の継続が非常に厳しくなりつつある状況を受けて、静岡県賀茂農林事務所が中心となり、「企画会議」を立ち上げて、行政（県、町）、地域、大学、NPOを集めて、柵田保全活動の運営方針について話し合う場が設けられた。対症療法的な対応ではなく、問題の根本的解決にむけたアプローチが求められたのは、ちょうど筆者が、柵田保全活動を引き継いだ時期であった。

1年にわたる企画会議を経て、2012年度から、大学も柵田オーナーになることによって、たんなる「お手伝い」ではなく、オーナーという帰属意識を持ち合わせて、田植え前の準備作業から収穫にいたる一連の過程を実践的に学ぶ場を生み出すことになった。石部柵田保全推進委員会会長かつ石部柵田保存会会長でもある高橋周蔵氏の協力を得て、2012年度に常葉大学が無償で柵田の1区画を借りてオーナーとなって管理し、2013年度以降、有償の正式な柵田オーナーとなり2区画の柵田を管理している。これまでのボランティア活動の参加者数と活動回数の推移は、表4の通りである。表4には、援農ボランティアだけでなく、石部地区を中心とする三浦地区での域学連携活動も含んでいる。

2012年度には、山本早苗ゼミと学生有志を中心に「ふじとこ伊豆プロジェクト」を立ち上げ、援農活動にとどまらない地域住民と協働した地域づくり活動へと転換を図る。ふじとこ伊豆プロジェクトでは、1) 地域資源の発掘、2) 地域の生活文化の世代間継承、3) 都市・農村交流の拠点形成を目的として、地域に根ざした活動実践に取り組みはじめた。

イベントや体験学習などを通じて、地域と学生たちとのつながりが深まる中で、従来の援農活動を継続しつつも、次節以降で詳述するように、地場産品の販売を行う「柵田マルシェ」や郷土料理を生かしたカフェ「いっぷく亭」を運営し、交流スペースを提供する活動にも取り組みはじめた。

石部柵田保全ボランティア活動10周年にあたる2013年度には「石部柵田の灯り<sup>5)</sup>」というキャンドルナイト・イベント（写真6）の手伝いや、石部柵田をステージにした「柵田音楽博覧会」に出演して、



写真4. 畦塗り体験  
(2012年4月28日、筆者撮影)



写真5. 田植え体験  
(2012年5月12日、柚木克彦撮影)

表4. ボランティア参加者数と活動回数の推移

年度	参加者数	活動回数	年度	参加者数	活動回数
2003	—*	—	2009	201名 (533)	7回
2004	5名 (10)**	2回	2010	165名 (429)	8回
2005	38名 (76)	2回	2011	149名 (340)	3回
2006	—	—	2012	155名 (376)	11回
2007	142名 (376)	5回	2013	206名 (551)	16回
2008	148名 (388)	5回	2014	208名 (451)	23回

出典：石部棚田保全ボランティア活動記録およびふじとこ伊豆プロジェクト活動記録をもとに筆者作成

\*表4における「—」はデータなし。

\*\*参加者数の（ ）内の数値は、活動日数に換算した参加者数を示す（「人・日」）。

民宿の女将を中心とする地域の女性たちとともに歌や踊りなどのステージ・パフォーマンスを披露して、交流の輪が広がっていった。同年度には東京ビッグサイトで開催された日本最大級の環境展示会「エコプロダクツ展2013」にて、これまでの活動成果を発表するパネル展示やステージ・プレゼンテーションを行い、同時に地場産品を販売する出張マルシェを開催して、広く情報発信を行い、他大学との交流の場づくりに努めた。2014年度は、さらに半島間連携や大学間交流に力を入れながら、表5のように活動の幅を広げていった。

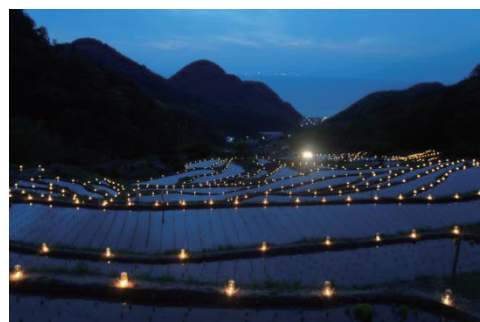


写真6. キャンドルナイト・イベント  
「石部棚田の灯り」  
(2013年5月18日、筆者撮影)

### 3. 「モノづくり」から「コトづくり」へ

#### 3.1 市場（いちば）づくり ～地元の魅力を発信、日常のほりあいを生み出す

石部棚田保全ボランティア活動は、これまで基本的に組織化せず、活動ごとに参加者を募り、出入り自由であることを重視してきたため、学生たちの活動の参加動機が多様で、全体の認識を共有したり組織化を図ったりすることが困難だった。

また、実際の活動の場において、学生たちと地域の方々との交流は、農作業の指導をする棚田保存会のメンバーとの交流に限定されており、民宿や地域の人たちと朝晩に顔を合わせて挨拶をするだけのつきあいとどまっていた。そこで、まず地域が抱えている問題や地域のニーズを掘り起こして共有することから取り組みはじめた。

地域と大学の関係変化のきっかけとなったのは、石部棚田保全活動のサブリーダーを務めた大石諒(当時、環境防災学部3年)が、2011年夏に松崎町役場と賀茂農林事務所のインターンシップのため石部に住み込み、地域住民との信頼関係を築いていったことによる。年間数回の大人数で行う援農ボランティアのほかに、地元から要請を受けて個人や数名で田起こしや草取りの手伝いに通う学生たちが現れるよ

表 5. 活動スケジュール（2014 年度）

	活動項目	参加主体	授業の位置づけ	受入地元協力者
4月	畦塗り	学ボラ*	ボランティア実習	石部棚田保存会、松崎町、 静岡県賀茂農林事務所
	桑の葉植樹	伊豆プロ**	—***	松崎町観光協会
5月	田植え	学ボラ	ボランティア実習	石部棚田保存会、松崎町
7月	草取り	学ボラ	ボランティア実習	石部棚田保存会
	石部大地曳き網まつり	〃	ゼミナール	石部地区
	青空マルシェ、いっぷく亭	〃	合同ゼミナール	石部こらっしゃい会
	予備調査	3年ゼミ	ゼミナール	雲見地区
8月	草取り	学ボラ	—	石部棚田保存会
	青空マルシェ、いっぷく亭	伊豆プロ	—	石部こらっしゃい会
	民宿インターンシップ	〃	—	民宿「石部荘」
	海・森ツアー補助 (NPO 森の蘇り主催)	〃	—	石部こらっしゃい会
9月	青空マルシェ	伊豆プロ	—	石部こらっしゃい会
	聞き書き	3年ゼミ	ゼミナール、社会調査Ⅱ	雲見地区
	郷土料理体験	〃	ゼミナール	雲見浅間会（老人会）
	全国半島間交流会	伊豆プロ	合同ゼミナール	津軽・半島のじかん実行委 員会、五所川原市、RPI（コ ンサル）、（後援：国土交通 省半島振興室）
10月	稲刈り	学ボラ	ボランティア実習	石部棚田保存会、松崎町
	青空マルシェ、いっぷく亭	伊豆プロ	合同ゼミナール	石部こらっしゃい会
11月	青空マルシェ、いっぷく亭	伊豆プロ	—	石部こらっしゃい会
	和歌山の棚田・段々畑 サミット(大学間交流)	〃	ゼミナール	和歌山県庁、和歌山大学
	富士山麓 A&S フェア	〃	〃	石部こらっしゃい会
	環境フェア	〃	〃	〃
12月	聞き書き補足調査	3年ゼミ	ゼミナール、社会調査Ⅱ	雲見地区
	青空マルシェ、いっぷく亭	伊豆プロ	—	石部こらっしゃい会
1月	新年会	伊豆プロ	—	石部こらっしゃい会
2月	古民家内見	伊豆プロ	—	石部こらっしゃい会
	松崎町・地域づくり	〃	—	〃
	シンポジウム参加	〃	—	〃
	田起こし、畦切り	〃	—	石部棚田保存会
3月	畦切り	学ボラ	ボランティア実習	石部棚田保存会、松崎町、 石部こらっしゃい会

出典：2014 年度の活動記録および活動予定をもとに筆者作成

\* 「学ボラ」は、学生ボランティアを表す。

\*\* 「伊豆プロ」は、ふじとこ伊豆プロジェクト・メンバーを表す。

\*\*\* 「—」は、経費負担も含めて、すべて学生の自主企画・運営による活動である。

うになると、少しずつ状況が変化し始める。石部地区で暮らす人々にとって、「トコハさん」という集合体として認識されていた学生たちと少しずつ対面的コミュニケーションが生まれはじめ、固有名詞を持った存在として一人一人の学生が立ち現れ、地域と大学の関係にも変化が訪れる。

さらに、2011年度最後の棚田保全活動の民宿代表となった石部荘の主人が、偶然にも、三浦地区の廃校「三浦（さんぽ）小学校」で最後の教頭を務め、退職して間もなかったため時間的余裕があり、次世代を担う子どもたちの教育や地域活性化への意欲を持ち合わせた人物であったことが幸いした。石部荘の主人や女将との交流を通じて、これまで行政や棚田保存会を中心に運営されていた企画会議では見えてこなかった地域の隠れたニーズが次々と明らかになっていった。

それぞれに思いを持っている人たちがゆるやかにつながりながら、何か新しい動きを生み出すことができないうという試行錯誤の結果、生みだされたアイデアが、地域の地場産品を販売する場をつくり、多くの人々が交流する空間を生み出すことだった。棚田で人々がつながり、交流する場を作ろうということで「Tanada de Marche（棚田マルシェ）」と名づけて、地域と大学が連携して地域おこしに取り組むようになった。

マルシェは、「市場（いちば）」を意味し、都市で暮らす人々と農山漁村で暮らす人々との交流の場づくりを目的とする。マルシェでは、図2で示したように、ただ「モノ」（地場産品）を販売することを目的とするのではなく、地域で培われてきた知恵や技を継承し、「モノ」を介して、人と人がつながり、新たな交流と賑わいが生み出されることに重きを置いている。

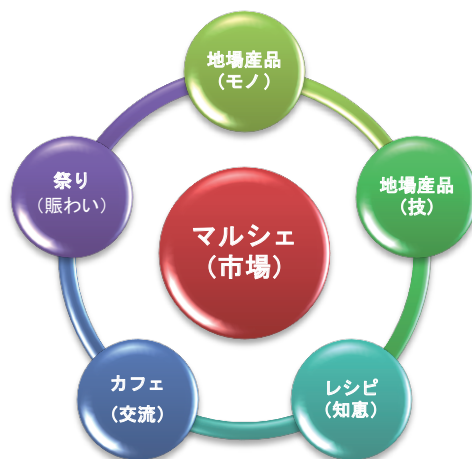


図2. マルシェ概念図

出典：筆者作成

無農薬・有機栽培の野菜や郷土料理など地域に眠っている宝物を共有できる場づくりとして、棚田の田植えと稲刈りのイベントの際に、マルシェを開催することになった。地域住民と大学協働による「棚田マルシェ」へと展開するために、まずは地域内部で協力者を募ることになった。たとえアイデアに共感していても、新しいことを始めるのに躊躇する地域住民の性格を考えると、学生とつながりがある地域住民の協力を得ながら、少しずつ仲間を増やしてゆく方向を探りはじめた。そこで、石部荘が会長となり、地域住民の有志からなる地域おこしの会「石部こらっしゃい会」を立ち上げることになった。

将来的には、定期市を開催し、地場産品を販売したり、郷土料理など食事もとれたりするような展望台カフェを作るという目標を共有しながら、まずは棚田に多くの人々が訪れる田植えと稲刈りの時期に限定して棚田マルシェを開催することになる。こうして地域と大学の連携のあり方が新しい段階を迎えた。

将来的には、定期市を開催し、地場産品を販売したり、郷土料理など食事もとれたりするような展望台カフェを作るという目標を共有しながら、まずは棚田に多くの人々が訪れる田植えと稲刈りの時期に限定して棚田マルシェを開催することになる。こうして地域と大学の連携のあり方が新しい段階を迎えた。

### 3.2 運営のしくみ

現在、60～70代となった民宿の女将経験者や現役の女将は、手に技を持っているだけでなく、地域活性化の意欲を持ち合わせている人々でもある。しかし、地域で何か新しいことを始めるには、地域内での合意形成が必要となり、行政との交渉もしてゆかねばならない。これまで地域の総会や行事において、女性が発言したり表舞台に出たりすることが暗黙裡にタブーとされてきた地域において、女性たち



がリーダーとして対応することは困難な状況であった。

そこで地域の女性たちの信頼を得ており、仲間をまとめる力のある男手が必要となり、石部荘の主人である高橋民吉氏が、住民有志による地域おこしを目的とする会を立ち上げ、地域の女性たちが参加しやすいしくみを作るようになったのである。石部こらっしあい会では、イベントの準備、運営、反省会にいたる一連の話し合いの場を定期的に設けることにより、女性たちが持っているアイデアや技を揃い上げる機能を果たした。

図3のように、石部地区での域学連携ネットワークの新たなアクターとして、石部こらっしあい会が誕生したのである。

棚田マルシェでは、石部こらっしあい会に所属していなくても、石部地区の住民であれば誰でも自由に地場産品を出品することができる。マルシェの企画運営に携わるコアメンバーが6名、出品という形でゆるやかにつながるメンバーが10

～20名いる。常葉大学学生有志は、毎回10名程度参加し、棚田マルシェの具体的な企画や店のディスプレイ、当日の準備から運営を地域住民と一緒に担っている。

石部こらっしあい会では、売上金の10%を手数料として徴収し、活動資金としている<sup>6)</sup>。表6には、マルシェの出品者数、出品総数、商品の種類、売上総額の推移をまとめている。第1回～第4回は、「棚田マルシェ」と名づけられ、田植えや稲刈りといったビッグイベントと同時開催となっており、朝9時～夕方4時まで2日間にわたって開催していた。第5回目以降のマルシェは、棚田マルシェを「青空マルシェ」と改めて、棚田でのイベントに限定せずに、毎月第1日曜日の午前中だけの朝市として定期開催している。第6回マルシェでは、開催場所をめぐる町役場との調整が難航したため、開催直前までイベントの詳細を広報できず、マルシェ開催の時期と野菜の収穫時期がうまく合わず、来客者数と出品数が低下してしまった。

しかし、その後、マルシェのチラシを石部地区では全戸配布し、三浦地区では回覧板で広報し、口コミでお客さんが増えることによって、売り上げが、しだいに増加していった。出品者数は、棚田マルシェ開催時に比べると半減しているが、これまでマルシェに参加していなかった女性たちが新たに参加し始めるなど、新たなネットワークが広がりつつある。

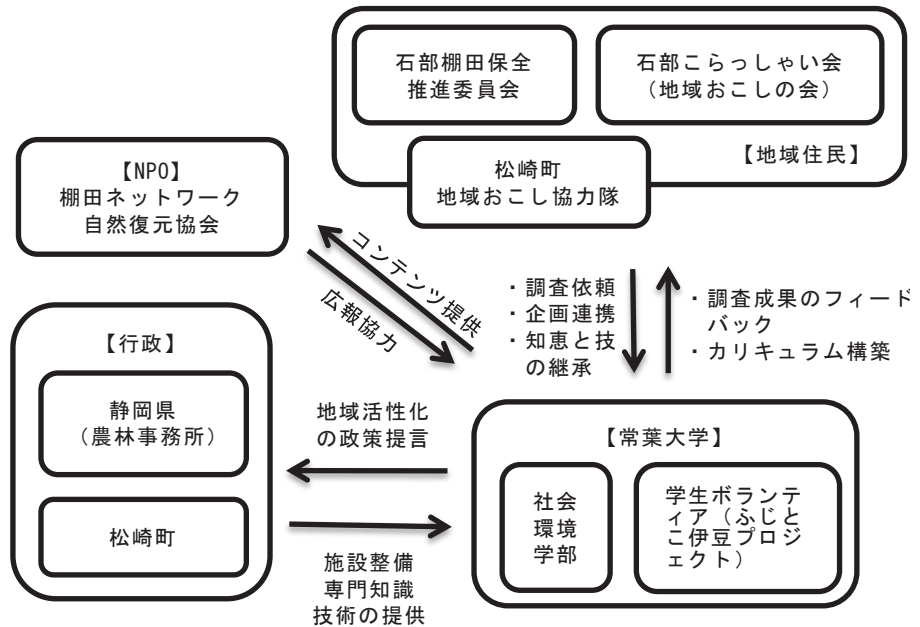


図3. 石部地区における域学連携ネットワーク

出典：総務省「「域学連携」地域づくり実証研究事業」（2012年度）における組織図をもとに筆者作成

表 6. マルシェの出品および売上金の推移

	出品者数	出品総数	商品の種類	売上総額
第1回 (2012年5月)	12名	388品	12種	49,650円
第2回 (2012年10月)	17名	488品	32種	74,670円
第3回 (2013年5月)	19名	858品	27種	142,100円
第4回 (2013年10月)	14名	494品	11種	92,750円
第5回 (2014年7月)	8名	277品	14種	58,900円
第6回 (2014年8月)	7名	158品	10種	24,600円
第7回 (2014年9月)	8名	151品	15種	15,200円
第8回 (2014年10月)	10名	312品	20種	46,620円
第9回 (2014年11月)	9名	204品	18種	46,500円
第10回 (2014年12月)	9名	253品	23種	56,500円
合計	23名	3,583品	84種	607,490円

出典：石部こらっしゃい会の活動報告をもとに筆者作成

### 3.3 マルシェ開催がもたらした地域の変化

マルシェに取り組むようになってから、これまで「余りもの」として捨ててしまっていた野菜や加工品が、「宝物」になるという発見が共有され、日常にはりあいがでてきた。マルシェでは、売り手と買い手との顔の見える関係が築かれ、地元住民と都市住民とのコミュニケーションの場にもなっている。地域では、「マルシェが楽しみで、生きがいだ」と語る女性たちが少なくない。

マルシェ出品者には、民宿を営む女将も参加しているため、棚田オーナーは、自分たちが宿泊している民宿やこれまで関わりのあった地域住民の出品している商品を買っていく。これが、棚田オーナーと出品した地域住民との新たな対話の入り口となる。さらに、棚田オーナーは関東圏を中心に県外の都市住民が多いため、お土産とした持ち帰られた地場産品が、新たな広報のツールにもなる。

マルシェが始まってから、出品者たちは、近隣の道の駅や地場産品の直売所を見学に行ったり、買い物に行った時にアンテナを張り巡らせて、ラベルやラッピングなど商品の見せ方を学び、次回のマルシェの出品時には、地場産品にレシピをつけたり、手作りのラベルをつけたりするなど工夫を凝らすようになっていった。出品内容にも広がりが見られはじめる。たとえば、これまで地場産品ということで野菜や果物、乾物が主流であったが、ジャムや漬物など加工品やどんぐりストラップやティッシュケースカバーなど手作り小物も出品されるようになった。マルシェでどのような商品を出品するか、どのように出品したらよいかという情報交換のネットワークも形成されている。

現在、石部地区では、最盛時に40軒以上あった民宿がわずか9軒に減少して、石部観光協会も解散

した結果、祭りやイベントなどの行事がなくなり、地域住民が集い交流する場が少なくなっていた。しかし、マルシェができたことにより、地域の人びとが新たに交流できる場が、再び生まれている。

マルシェの定期開催以降、学生だけでなく地域住民も、店番を担当するようになり、地元住民も買い手としてマルシェを訪れるようになった。独居老人や病気を抱える高齢者が増加している地域の現状を考えると、町までバスに乗って買い物にでかけるのは不便であり、マルシェで地元の野菜を購入できたり、地域住民が気軽に集い、買い物ついでにお喋りしたり交流できる空間が生まれたことの意味は大きい。

### 3.4 交流空間の創出

棚田マルシェを開催した翌年には、新たな課題が見えてきた。地場産品の販売にとどまらず、オーナーが気軽に立ち寄って休憩できる空間や地域の郷土料理を味わってもらえるような場を作れないかというニーズが、棚田オーナーや運営側の双方から出てきた。マルシェで販売される地場産品の商品説明を学生が求められた時に、オーナーたちの関心が、「どのように栽培されたのか」ということにとどまらず、「どのように調理、加工すると良いのか」という地域のレシピを求めるようになっていたからである。これまでは無農薬野菜という出品者のこだわりや石部ならではの食材という「モノ」の良さを伝えることに重きを置いていたが、「モノ」を通じて石部の魅力をより深く伝えることができないかということが課題となった。そこで2013年度から、みんながゆっくり休憩できる場所ということで「いっぷく亭」と名づけ、都市住民と地域住民が交流できる空間づくりがはじまった。

マルシェに併設されたいっぷく亭では、「ごじる、ところてん、しそジュース、おしるこ」など、石部地区の女将たちから教えてもらった郷土料理をふるまったり、海と棚田を一望できる場所に休憩処を設営して、コーヒーをサービスして気軽に立ち寄り交流できる空間を生み出している。また家族連れで来ている棚田オーナー向けに、子どもたちの遊び場を作ったりもしている。

石部こらっしあい会では、将来的に、展望台カフェを設営するとともに、廃校や廃施設を活用して地域の交流拠点を形成することによって、地域内の交流を促進することを目標に掲げている。そこで、2014年度からは、「棚田マルシェ」から「青空マルシェ」へと改名して、毎月第一日曜日をマルシェの日として、松崎町役場から石部公民館前の駐車場を借りて、定期市を開催するようになった。

## 4. 地域文化の世代間継承 —プロセスを記録する

### 4.1 「声」と「記憶」の継承

ゼミナールでは、これまで地域社会と自然とのかかわりの変化をテーマに、富士山麓と伊豆半島を中心にフィールドワークを実践してきた。石部地区でのマルシェ開催を通じて地域住民との関係が深まるにつれて、さらなる地域資源の発掘や地域文化の世代間継承の場づくりを模索するようになった。そこで、2012年秋から、専門科目「社会調査Ⅱ」の一環として、石部地区にて聞き書き調査に取り組みはじめる。

聞き書きとは、地域の古老（名人）たちに、これまでの生業や人生経験について話を聴き、その語りを文章にまとめ直してゆく過程のことである（写真7）。古老が語る人生の言葉を一言一句余すことなく書き起こし、先人の人生を辿りながら物語としてまとめ直す作業である。

聞き書きは、世代を異にする人間に経験を伝える過程だが、語り手から聞き手へと一方向的に進んでゆくものではない。聞き書きは、ライフヒストリーと同じく「標準化された質問紙による質問・応答会見とはちがひ、語り手の発話を阻害しないように配慮しつつ、比較的自由的な会話に基づく」語りが行われ、「語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築されるもの」である（山田 2005：11）。「何を語ったのか」という語りの内容にとどまらず、「いかに語ったのか」というコンテキストが重要な意味を持つ。聞き書きでは、語り手と聞き手がたえず変化してゆき、役割の転換を経験し、意味を再発見してゆく過程であり、一度限りの「場」の力を持つものでもある。



写真7. 聞き書き風景  
(2013年9月27日、近藤伸子撮影)

2012年度は、「石部衆の暮らし」をテーマに、おもに80代以上の地域住民に語り手になっていただいて、地域の歴史や神社・祭礼、炭焼きやミカン栽培、桜葉栽培などの生業、世界の海をめぐり生きてきた漁師の人生、女百姓の生きざまについて語っていただいた。

2013年度は、60代～70代の世代を対象に、高度経済成長期以降、伊豆半島に押し寄せた観光化や開発の波が、地域社会にいかなる変化をもたらしたのかを理解するために、「変わりゆく地域の現在」をテーマとした。民宿業を営む女性たちが経験した近代化を丁寧に掬い上げるとともに、過疎・高齢化を背景に地域おこしに取り組む次世代リーダーの取り組みを語っていただいた。

これらの聞き書きを通じて、学生たちは、これまで当たり前だと思っていた日常世界が大きくズレる瞬間を体感した。語り手たちも、学生たちの素直な驚きや共感する姿を目の当たりにして、当たり前の日常のつまらない積み重ねと思っていた自分の人生の価値や経験の豊かさを再発見していく。このように聞き書きの醍醐味は、過去に起こった事実を再確認して記録するのではなく、対話を介してお互いに記憶を紡ぎ直し、語り手と聞き手の双方が予想もしていなかったような地点へと辿りつくことにある。

聞き書きの準備から調査、その後のテープ起こしや編集作業は、当初予想していた以上に学生への負担が大きく、編集作業の途中で挫折して投げ出してしまう責任感のない学生が現れてしまうこともあった。選択制の講義では、学生の意識やモチベーションによって簡単にドロップアウトされてしまうことがあり、時間をかけて築き上げた地域との信頼関係を損ねてしまうリスクを抱えざるをえない。学生一人一人に対して、きめ細やかな指導が求められるため、2013年度からは聞き書き調査をゼミナールでの活動として位置づけることにした。

初年度は、報告書の編集作業を筆者一人で行っていたが、2013年度からは、ゼミ生が編集、デザインや校正作業に至る一連の過程をすべて担当して、自分たちの手で報告書を完成させた。聞き書きの成果をまとめた報告書は、石部地区にて全戸配布したほか、域学連携でつながっている行政やNPO等にも配布した。地域の方々から「一生の宝物ができました」、「地域の良さを発見できました」という言葉が寄せられた。聞き書き集は、地域の生活文化を次世代に継承するツールや新たな地域おこしの知恵が詰まったアイデア集となっている。

#### 4.2 ローカルな知恵と技の継承 ～郷土料理体験&手わざ体験

言葉だけで伝えることには限界があり、言語化できない五感やローカルな経験知というものがある。

こうしたローカルな知のあり方を学ぶために、ゼミナールでは、聞き書きと合わせて、地域の女性たちの協力を得て、郷土料理体験（写真8）や手わざ体験（写真9）の場を設けてきた。郷土料理体験では、半島地域固有の海・山・里の恵みを生かしたレシピを中心に、地域の記憶と結びついた食文化や手わざを次世代に継承することを目的とした。

具体的には、正月や祭礼などハレの日の食事、日常的なケの日の食事、野良仕事に欠かせない弁当、子どもの頃のおやつなどを取り上げた。郷土料理の作り方を教わるにとどまらず、レシピには示されない食と結びついた思い出を聞き取るにより、ローカルな食をめぐる記憶を記録することにつながった。

祝い事や運動会など地域の行事に欠かせなかった「肉めし」は、鶏肉を甘辛く炊いて作ったおにぎりで、大豆をすりつぶしたものに汁と味噌を足して煮込んだ「ごじる」とともに石部を代表する郷土料理である。また、みなが磯で競い合うように採った貝を味噌汁に入れた「磯もん汁」、野菜たっぷりですべてで冬場に温まる「のっぺい汁」、稲わらで豆腐を包んで縛ることで稲わらの香りを移して煮物の材料にする「つと豆腐」やこんにゃく作りを体験した。あんこたっぷりの「べったら餅」やサツマイモを使った「さつまもち」は、砂糖が高価な時代には貴重なおやつだった。磯で採れた天草から作った「ところてん」は、今なお西伊豆の名産である。貝獲りや天草採りをめぐっては、地域社会で取り決めがなされており、独特のローカルな技法を駆使して行われる。

郷土料理を学んでいると、旬の食材を余すことなく利用する工夫として保存食の技が随所に見てとれる。たとえば、石部地区では、温州ミカン、夏ミカン、甘夏、ハルカ、ポンカンなど数種類のミカンを栽培しているが、旬の新鮮な食材は、一時に大量に収穫されるものであるため、ジャムやマーマレード、ドレッシング、ピールやシャーベットに加工して、単調になりがちな食に彩りを添える役割を果たす。すべてではないが、自分たちで種取りをして栽培するなど「地種（じだね）」を保存、活用して、在来種を生かした農業を営んでいる様子も垣間見えた。郷土料理体験を通じて、農や食と地域社会のつながりを深く理解することができる。

## 5. 域学連携の困難と新たなネットワーク

### 5.1 プラットフォーム形成と合意形成の陥穽

これまで石部地区では、2011年から行政や石部棚田保存会が中心となり、関係者を集めてインフォーマルな打ち合わせや企画会議を何度も積み重ねてきた。2012年度には、国交省半島振興室の支援を受け、「半島担い手強化プログラム」として石部地区における域学連携活動が採択され、多様なステークホルダーが集うプラットフォームの形成を目的にワークショップや体験講座が開催された。

しかしながら、棚田保全活動が行き詰まっている現状において、地域内部は大きく2つに分かれていた。棚田保存会は、現在の農作業の労働力を確保する方策に焦点を当てて、棚田保全をコアにしたプラッ



写真8. 郷土料理  
(2012年11月9日、筆者撮影)



写真9. 手わざ体験で藁ぞうり作り  
(2013年1月27日、筆者撮影)

トフォーム形成を志向していた。それに対して、石部こらっしゃい会では、より幅広い仲間を巻き込んだ地域づくりの場を生み出し、地域活性化の1つの方法として棚田保全を位置づけていた。「地域を良くするため」、「地域活性化」と同じ目的を掲げながらも、両者の方法論がまったく噛みあわず、何度会議を開いても、その都度、紛糾してしまった。

棚田保存会では、農作業の担い手不足を問題にしているにもかかわらず、イベント参加に偏っている棚田オーナー制度の問題点を話し合ったり、棚田オーナーのニーズを掘り起こしたり、企画・運営に参加する意欲を持つ棚田オーナーや都市住民を巻き込むような仕掛けづくりを試みるという方向に展開することはなかった。

問題のある一面のみに焦点化する方法では、当面をしのごうことができても根本的な解決には至らない。70代以上のメンバーで棚田を維持管理していかなければならない棚田保存会にとって、目前にある「人手不足」（農作業の人員不足）という問題の解決が急務であるがゆえに、その問題の背後にある石部地区の問題や広く農山漁村が抱えている構造的な問題への批判的なまなざしを醸成して、より大きな枠組みの中に現在の問題を位置づけるには至らなかったのである。

プラットフォーム形成のための話し合いの場を通じて、棚田保全活動が、地域の中で賛同を得ているわけではなく、棚田保全活動への反対者も多数おり、社会的合意を共有しているとは言い難い状況もしだいに明らかになり、棚田保存会を取り巻く複雑な社会関係や地域のしがらみが見えてきた。もつれあった糸をときほぐすのは容易でなく、よそ者の介入が許される問題でもないため、合意形成は非常に時間のかかる困難を極めるものであった。

棚田保全のあり方をめぐって地域内で議論が紛糾している現状において、手続き的な合意形成やプラットフォーム作りに時間をかけることで、メンバーの時間と労力を浪費してしまい、溝が深まるばかりの状況に陥り、相互にフラストレーションが溜まり出口の見えない状況が約2年間も続いた。

地域社会への深いコミットメントが、問題解決につながるのではなく、むしろ関係するアクターの内に想定していなかった地域の矛盾や厄介な問題を持ち込むことになることがある。「域学連携」という耳触りのよい状況から切り離され、現実のしがらみや地域の切実な問題状況を突き付けられる。しかし、本活動では、連携など不可能ではないかと放棄しかけた限界ギリギリの地点から、これまで地域の中で発言力を持たなかった人たちとつながることによって、新しいネットワークを生み出していった。

## 5.2 組織化せずにつながる方法

石部こらっしゃい会とふじとこ伊豆プロジェクトでは、棚田保存会との合意形成の努力を続けながらも、これまで地域の裏方であった女性たちや次世代と位置づけられる60代以下の地域住民とつながることによって具体的なアクションを起こしながら、地域と大学の新たな連携のあり方を模索しはじめる。その際、「何をするか」ではなく、「だれと」「どのように」コトづくりを進めるのかというプロセスを重視した地域づくりへと転換していった。基本的に「この指とまれ」方式で、メンバーから出てきたアイデアに共感した人たちでチームを作り、プロジェクトを運営してゆく方式をとった。

ふじとこ伊豆プロジェクトでは、基本的にゼミでもなく、サークルでもなく、講義でもなく、できるだけ組織化せず、ゆるやかにつながったオープンな関係を構築することに主眼を置いている。イベント参加希望者や関心のあるメンバーが出入り自由で参加できる。ただし、プロジェクトには、コアメンバーが存在しており、コアメンバーを中心にプロジェクトの企画・運営を話し合ったり反省会を開いたりす

る。

プロジェクトをめぐるネットワークの作り方は、非常にゆるやかであるが、学生たちと地域とのかわり方は非常に濃密で、強い結びつきにもとづいている。プロジェクト・メンバーの学生たちは、石部地区を「第二の故郷」「第二のわが家」と呼び、石部という空間に新たな意味づけを行い、地域が抱えている問題を「自分事」として捉えるようになった。プロジェクトを通じて、関係変化のプロセスを経験していったのである。

### 5.3 つながりをつけるプロセス

石部棚田保全活動が10周年を迎えた頃から、他地域で活動する団体との交流を積極的に促進し、フィールドを囲い込まない活動への展開を試みている。現在もっとも力を入れていることは、さまざまな活動に取り組んでいる他地域や他大学との交流および全国半島間交流である。

大学の垣根を越えたネットワークとしては、静岡大学の棚田研究会メンバーとともに石部地区で農業体験を行ったり、本プロジェクト・メンバーが、石部大地曳き網まつりの実施に合わせて、静岡大学や静岡県立大学生を石部地区に案内するミニツアーや交流会を企画運営した。

さらに、紀伊半島を有する和歌山県有田川町にて2013年に全国棚田サミットが開催され、そこで石部棚田保全ボランティアの学生リーダーが活動報告を行ったことが契機となり、和歌山大学との交流やつながりも生まれ、大学間交流会が実現した。本プロジェクトのコアメンバー3名が、2014年11月15～16日に開催された「第1回わかやま棚田・段々畑サミット」に参加して活動報告を行い、和歌山大学、近畿大学、大阪市立大学、玉川大学の学生たち15名と交流を深めた。この交流がきっかけとなり、近畿大学の学生5名が、石部の畦切りを体験し、大学間交流会を学生主体で企画運営するようになった。

大学間交流にとどまらず、全国の半島間交流にも新たな動きが見られる。2012年度に国交省半島振興事業の成果報告会にて、従来の行政主導の半島振興事業を脱して、民間主体による草の根レベルの半島間交流事業に取り組もうという流れが各半島地域から生まれた。この流れを受けて、2014年9月に津軽半島で初めて民間主導による全国半島間交流会「津軽でつながる半島のじかん」や着地型観光ツアーが企画・実施された。本プロジェクトのコアメンバー6名が参加して、今後の活動を展開してゆくために、コミュニティ・ビジネスの取り組みや各地の半島から参加した人々との交流を通じて見聞を広めた。「つながりのプロセス」において十分に「ふさわしい場所」を空けておけば、事前に想定したこと以上の展開、または、事前には想定できなかった展開がもたらされる可能性が常に存在し、「つながりをつけるプロセス」は、人と人との相互作用がうまく循環すると「動的情報」を無限に生み出すのである（金子1992：206）。

地域を超えたつながり、半島地域をつなぐ活動へと展開してゆくために、本プロジェクトでは、プロセスを重視し、個人単位ではなくチームを組んで実践する活動に重きを置いている。従来の体験を重視した活動から経験への深化を図るために、問題を自分事として捉えなおし内在的な問いを生み出すことが、現在の大きな課題である。地域の問題が自分に返ってきて自分自身を問うことになるような仕掛けが必要になる。

域学連携による地域づくりは、地域社会が抱える問題や構造的矛盾がたえず「内」に持ち込まれるリスクを抱えながらも、社会を多様で豊かなものにする新しいものの見方や新しい価値を発見し、社会の閉塞状況を打破するためのひとつの「窓」となりうるものである。他者の問題に巻き込まれ、他者の問

題を「自分事」化することによって、相互依存のネットワークの中に生きる自己を認識し、他者と協力しながら問題解決に向けて実践する力を涵養することが可能になるのである。

## 注

- 1) 全国棚田（千枚田）連絡協議会が主催している全国棚田（千枚田）サミットは、1995年に、高知県梶原町で初めて開催され、それ以降、毎年1回、全国の棚田地域にて開催されている。松崎町の石部棚田は、棚田百選に認定されていないが、棚田学会賞を受賞した経歴を有し、多主体連携による継続的な棚田保全活動が評価され実施に至った。
- 2) NPO法人「日本で最も美しい村」連合は、平成の大合併による地域資源や美しい景観を有する村の存続危機に直面して、2005年に7つの町村からスタートした。フランスの素朴な美しい村を厳選し紹介する「フランスの最も美しい村」運動に範をとり、日本の農山漁村の景観・文化を守りつつ、最も美しい村としての自立を目指す運動として展開されている。詳細は、「日本で最も美しい村」連合HP <http://www.utsukushii-mura.jp/> を参照のこと。
- 3) 地域の担い手不足への対応や都市・農村交流を目的に、都市住民をオーナーとして募る棚田オーナー制度は、全国各地の棚田で取り組まれている。石部地区では、年会費35,000円を支払うことにより、オーナー1組あたり約100㎡（約30坪）の棚田での農業体験（田植え、稲刈り）を行うことができ、収穫後に20kgの棚田米が送付されるしくみとなっている。詳細は、石部棚田へ行こうよHP [http://ishibu-tanada.com/owner\\_trust.html](http://ishibu-tanada.com/owner_trust.html) を参照。
- 4) 棚田トラスト会員は、年会費10,000円（1口）を支払って、1口あたり5kgの棚田米を受け取ることができる。希望すれば、田植えや稲刈りの農業体験を行うこともできる。遠方に居住しているため棚田での作業に参加できないが、棚田保全活動の趣旨に賛同した人が、地域を支援するしくみとなっている。
- 5) このイベントの主催は、棚田保全推進委員会だが、実際には、松崎町および松崎町地域おこし協力隊を務める本学卒業生が中心となって企画・運営を行った。石部は、もともと「石火」と呼ばれていたという地域の歴史を生かしつつ、都市・農村交流を深めるためのイベントである。
- 6) 第1回マルシェでは、売上金の5%を手数料として徴収して石部こらっしゃい会の活動資金とした。しかし、反省会の場で、出品をしていた地域住民から、石部こらっしゃい会が準備にかかる手間や当日の店番をしている学生のことを考え、手数料が少なすぎることになり、第2回以降のマルシェから売上金の10%を手数料にすることで合意が得られた。手数料は、おもにマルシェで使用するテントや文具類の支出に充てられている。

## 参考文献

- 岩本通弥・菅豊・中村淳（2012）『民俗学の可能性を拓く 「野の学問」とアカデミズム』青弓社。
- 筧裕介（2013）『ソーシャルデザイン実践ガイド 地域の課題を解決する7つのステップ』英治出版。
- 金子郁容（1992）『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波書店。
- 小林優太・山本早苗編（2014）『聞き書き「半島の旅」2 ～変わりゆく地域の現在～』（富士常葉大学社会環境学部・山本早苗ゼミナール平成25年度活動報告書）。
- 菅豊（2013）『「新しい野の学問」の時代へ ——知識生産と社会実践をつなぐために』岩波書店。



山田富秋編著（2005）『ライフストーリーの社会学』北樹出版.

山本早苗編（2013）『聞き書き「半島の旅」～石部衆の暮らし～』（富士常葉大学社会環境学部・平成24年度「社会調査Ⅱ」報告書）.

